「少年」の正体
――川端康成「日本人アンナ」論

小林幸夫

1 兄妹の共生

川端康成の掌篇小説「日本人アンナ」（昭和四年三月九日「東京朝日新聞」）は、高等学校の学生「彼」（以降、カギカッコは基本的に省略する）が、亡命ロシア人貴族の少女アンナに浅草で出会う話である。しかし、彼はそれ以前に、不可避的に一人の少女に出会っていた。「妹」（以降、カギカッコは基本的に省略する）である。テクストの構造としては彼とアンナとの関係が前景となっているのであるが、後景には彼と妹との関係が常に存在している。彼はアンナを追い駆ける一方で、妹を常に慈しんでいた。つまり彼は、同時並行的に二つの愛を遂行していたのである。

彼は「高等学校の学生」であり、妹は、「クラスの方が」と発話し彼もまた「女学生の流行に――」という心内語を発していることからすると、女学校の生徒と考えられる。年齢で言えば、二十歳前後の彼と、十四、五歳の妹との兄妹と想定される。そして、この二人は、本郷で下宿生活をしている。ということは、彼は第一高等学校に籍を置いていると思われ、妹もその付近の高等女学校に通っているものと推定される。二人とも親元を離れているということは、地方の出身とも考えられるが、二人の会話が標準語でかつ生活感覚が都会に馴染んでいるように見えることからすると、東京郊外の出身なのかも知れない。

この兄妹は仲が良い。親密すぎると言ってもよいくらいである。その象徴が財布である。

彼等はきやうだい二人で一つの財布しか持つてゐなかつた。もつと正しくいへば、兄が時々妹の財布を借りるのだつた。黒い革の馬蹄型の小銭入（こぜにいれ）だが、赤い線の縁取りが女のしるしだつた。

財布を兄、妹が別々に持たず、一つを共有する。それ自体は、金銭を共有するほど、自他の区別のない、一心同体的な認識と感覚を互いに持っていることを示すものである。しかし、ここには微妙な感覚も働いている。財布そのものは女性用であり、基本的には妹が持ち、必要に応じてか兄が借りる、という形の共有なのである。この財布のあり方は、妹に金庫を持たせてそこからかなり自由に金を引き出す形態とも言え、このようにしているということは、妹を大

切にしていることには間違いないが、疑似的な母子関係、夫婦関係にも近い。妹をしっかりさせておいてそれをほほえましく思う、甘えもほの見える。ともかく、信頼と許しの上に、親密な共生が兄妹のなかで成り立っているのである。

このような財布が成立した経緯は次のようなものであった。

彼が妹に誘ひ出されてある百貨店へ行つた時、化粧品を飾つたガラス箱の上の籠をのぞいて、「五十銭均一」の札を唇で指しながら妹は、

「クラスの方がみんなこの財布を持つていらつしやるのよ。」

それではと買つた財布だつた。

この記述からすると、妹がクラスメイトの多くが持っているこの財布を欲しいと思い兄を百貨店に連れ出し、買ってもらった、もしくは買うのに同意させたものと思われる。そして、この馬蹄型の財布は、女学生に流行したものであった。ということは、この財布は女学生を象徴するものであり、その意味でも本来は妹用のものであり、兄は妹を慈しむあまりに妹に癒着し、基本的には妹が所有しながらも共有とし、「時々」借りることでその親密感覚を味わっていたものと思われる。単なる平等としての共有ではないことに、注意しておく必要がある。

ところで、この財布が、小間物屋で買ったものではなく、百貨店で買ったものであり、「五十銭均一」の「籠」、今で言えばワゴンのセールで買ったことにも、特色が見出せる。関東大震災以降、デパートは大衆化し、不特定多数の人が匿名的に、しかも何かを買う気がなくても自由に出入りできる空間となっていた。日用品売場も開設された。その様子は、この財布の売り方にも反映されており、ちょっと質のよいものを安価にワゴン・セールでという、大量消費による流行の発信ともなった。

このテクストの時代確定については、アンナたちが「映画の休憩時間に」出演していた「N館」を日本館と査定し、その日本館が映画を上映していた時期、「映画」という用語が使用され出した時期を根拠に、舘健一[1]が、「大正十三年後半以降昭和四年頃まで」としており、首肯すべき見解と思われる。それを踏まえて、当時におけるこの「小銭入」の財布の値段が、他のものと比べてどのような位置にあったのだろうか。『値段史年表　明治・大正・昭和』[2]によれば、都心の普通のカレーライスの値段が十～十二銭（昭和二年、東京有楽町「更科」の蕎麦（もり・かけ）が十銭（昭和初年代）、江戸前寿司の並が二十五銭（昭和五年）、駅弁の幕の内が三十銭、幕の内以外が二十銭（昭和五年）であった。カレーライスや蕎麦の五倍、寿司や駅弁の約二倍がこの財布の値段である。現在で言えば、三千円前後に相当するように思われる。とすれば、小銭入れとしては、少し高めではあるが、恵まれた身分であった女学生には手の届く値段であったと見られる。

2　接近の犯罪性

彼は執拗にアンナに接近してゆく。この接近のスリリングが、このテクストの中核を成している。テクストは三人称小説のスタイル

で、語り手は彼の行為に寄り添いながら記述してゆく。しかし、テクスト内の時間はかなり錯綜していて、事柄の前後はみごとに入り組んでいる。彼のアンナへの接近を、時系列に整理すると、次のようになる。

N館が終演となり、N館を出たアンナを彼は追跡した。ローラー・スケートを見物するアンナの直ぐ後ろに立ち、振り向いたアンナに足を踏まれ、その時に財布を掏られた。掏られたことに気づかないまま、彼は、露店で塩豆を買うアンナが自分と同じ財布を持っているのを見て、アンナも女学生と同じ気持ちを持っているのかと思って親近感を深める。アンナが木賃宿に着くと、外からその二階を見つめる。同じようにアンナの後を追って来たと見られる中学生が彼に出会いたまれず去ると、彼は木賃宿に入り泊ろうとする。すると財布が無いのに気づき、同時に、ローラー・スケート見物のときにアンナに掏られたと気づく。しかし前金でないと泊めないと番頭に言われ、本郷の下宿へ帰る。これ以後は、時間軸に添って記述される。次の晩また木賃宿へ行きアンナたちの隣の部屋へ泊るが、アンナたちの寝た気配を感じ取っただけで一夜を過ごした。三晩目にも彼は木賃宿へ行き、アンナの部屋を覗き、部屋へ入って寝ているアンナの枕元に、その日百貨店で買った同じ財布に二十円を入れて置いてきて、寝た。目覚めると、彼の部屋の襖の裾に二つの財布が置いてあり、隣の部屋にアンナたちはもういなかった。

これが、彼のアンナへの接近の全容である。この接近は、大きく二つに区分されるかと思う。N館を出たアンナの後を追う接近と、アンナたちの隣の部屋へ泊る以降の接近である。前者は、接近といってもまだ微温的である。アンナがローラー・スケートを見ているときの彼の様子は、次のように記述されている。

彼はアンナの直ぐうしろに立ち、マントの袖を彼女のショオルに触れるともなく触れさせた。

彼は、見物人に紛れてアンナに身体的に接近し、マントの袖でショールに触れるという、身体の外延を使用して疑似的な身体接触を試みている。状況的自然は装えており、相手にも気づかれていない点において犯罪から遠いが、心理的には故意の一方的な接近、接触であり、犯罪性が少し認められる。振り向いたアンナは彼の足を踏むと同時に財布を掏ったわけだが、このとき、アンナの「微笑」と「きらり」とした「にら」みの顔に対面し、彼は行動を決定的なものとしたのである。

彼は後をつけることにきめた。

財布を掏られているとも知らず、初めて一言言葉を交わし、アンナと対面したことで、尾行は決定された。ここには、他者と対面することで個人として認知されたと思う思い込み、錯覚がある。なぜこのような錯覚が起こるのか。そこには、心奪われ、惚れてしまった者の、一方的な、認知されたい欲望があるからだ。

このあと、決心のもとに尾行し、アンナが塩豆を買うとき、自分と同じ財布を持っているのを見て、彼は次のような行為に出ようとする。

この同じものを持つてゐると知つただけで、彼はふと一歩踏みだして彼女に声をかけようとした。

これは、同じ財布を持つという共通点を見出すことによって、他者を同族と見る心理が働いているのであり、惚れているからこそ、そして既に認知されていると思っているからこそ踏み出せる行為であった。ただし、アンナが弟の肩を抱いていることによって、思いとどまったものらしい。

そして尾行の末、木賃宿に入ったアンナを外から見ようと、胃腸病院の白壁を背にして立つ。ここまでは、接近としては、いわば外部接触の試みであり、接近はまだ微温的であり、惚れた異性の後を追ったという範疇の、まだ健全性をかろうじて保ち得る接近と言える。

ところが、この木賃宿の、アンナの部屋の隣りの部屋に泊るという行為に出たところからは、健全性が薄れてゆく。彼と同じようにアンナを尾行してきたと見られる中学生とばつの悪い対峙の末、中学生が走り去る。中学生は十二歳から十七歳の間の年齢であることが一般的であり、高校生とは年齢差の上で敗けたと判断した、と考えられる。そのあと、宿泊しようとする。同じ宿に泊ってアンナの生活の一部を体験し、同時体験を生きたような一体感を味わうと言えば少しはロマンチックにも見えるが、隣の部屋に泊ることを故意にするということは、様子を窺う張り込みに近く、犯罪性の認められる接近と言ってよい。この晩は、結局は、その前にアンナに財布を掏られたためと、前金制のために宿泊はできなかった。

しかし、次の夜、再びアンナの隣の部屋を取り、次の行為に出る。

彼はふすまの隙間からアンナの部屋をのぞいてみた。

襖の隙間から、彼は覗く。襖は部屋と部屋の仕切りであり、日本建築の住居では必須の建具である。紙による仕切りなので、隣の部屋の動静などは感知できるし、場合によっては会話も聞こえてしまう。個室性の低い仕切りである。ゆえに、彼がアンナの動静を感知しようとしたことはまちがいない。問題は、隙間から覗く行為である。覗きは、基本的に他者の私性を故意に見る行為であり、他者にとっては見られていないと思っていることが見られているのである。隙間があっても故意には見ないのが倫理というものである。だから、覗くということは、犯罪とみてよい。彼は見た。アンナたちの肌着、トランク、ハーモニカ、花環、木馬、ロシアの勲章である。これは、アンナが帰宅する前の様子であり、帰宅してからは覗いてはなく、アンナたちが寝た様子を感じ取っただけであった。ただし注意すべきは、アンナの部屋を漠然とではなく克明に見ていることである。「倒れた木馬は首に、これはおもちやでないらしいロシアの勲章をさげてゐる。」などは、細かい情況と小さいものが捉えられており、「衣桁にほこりじみた花環一つ」には、微細な感知があり、アンナたちが長い間この稼業をしていることが感得される。つまり、覗きが強度である。ここに、彼の興味と犯罪性の強度が出ている。

しかし、これは大局的にはまだそれほど大きな犯罪ではない。問題は三晩目に、アンナの隣の部屋に泊った時である。この時の彼の行為は、明らかに犯罪と言っていい。彼は、二度覗いている。一度

目はアンナが肌着を繕っていた。二度目はアンナも寝ていた。ところがこの二度目に彼は襖を開けてアンナの部屋に侵入し、アンナの枕元に今日百貨店で買った同じ馬蹄型の財布を置いて戻った。財布には二十円を入れて。この行為は、彼からすれば金の贈与であっても一方的であるし、それ以上に、部屋に入ったこと自体、家宅侵入であり、当然犯罪である。

問題のひとつは、これまでの研究において、アンナの掏りという犯罪には注目したが、彼の犯罪性は指摘されなかったことである。一般的な見地から言えば、彼は、覗き、及び家宅侵入を犯しているのであり、見方によれば、ストーカー行為も加えられる。この点に注目し、また確認しておく必要がある。そしてもう一つの問題は、彼に、全く犯罪意識が無いことである。アンナが実は彼から掏った財布で塩豆を買っているのに、それとは知らない彼は、「この可憐なロシア娘もまた女学生の流行に――」と、好意的に見ている。「――」部は、乗っているにちがいない、との省略表現と考えられる。ともかく彼は、アンナをひたすら「可憐なロシア娘」として憧れ慕い、「革命に追はれた漂泊(さすらひ)のロシア貴族の孤児」という観念でアンナに同情を寄せていることで心がいっぱいになっていて、自らの行為が犯罪または犯罪性を帯びていることに全く気づいていない。彼はアンナに迷惑をかけている、またかけるかも知れないという感度は全く所有していない。「可憐なロシア娘」を見守り助ける善意の青年としか思っていないのである。語り手は、彼が二十円入った財布をアンナの枕元に置いてきたことを、「幼い心づくし」と命名している。その言辞も踏まえれば、彼は、独善的な意識のもとに全く気づかず犯罪的行為を行っていたのであり、語り手の言う「幼い」の中身は実はこのようなものであった。そして、何より、語り手が、「却つてアンナを脅かしたのだ。」と明言したように、アンナがこの木賃宿から立ち去ったこと自体が、彼の行為の犯罪性を証明している。

3 財布の交通

きわめて比喩的な言い方をすれば、このテクストの主人公は財布である。「彼等はきやうだい二人で一つの財布しか持つてゐなかつた。」で始まり、「果して財布がない。」で終わるテクストなのである。その間、財布は二つに増え、そして、彼とアンナの間を行き来する。その行き来を、テクストの叙述の順序ではなく、テクスト内時間の流れにおける順序に整理すると、次のようになる。

まず、彼が妹の財布を借りて持ち、N館を出たアンナを追い、ローラー・スケートを見物しているとき、アンナにその財布を掏られた。この時財布はアンナに移行する。その後、アンナが塩豆を買っているとき彼は自分のと同一の財布を見たと思うが、それは自分の財布であった。掏られたことに気づいていない。その後、アンナの泊っている木賃宿に泊ろうとして財布が無いことに気づき、同時にアンナに掏られたことを自覚する。次の晩は、彼は財布無しで泊る。ところが、三晩目には、アンナに掏られたのと同じ財布を買って彼は泊る。財布は二つになり、その晩は、アンナが一つ、彼

が一つと、財布を持つことになる。その明け方、彼は財布に二十円を入れ、それをアンナの枕元に置く。この時、物理的に財布は二つともアンナのところへ行った。その後彼は寝入り、目覚めると、自分の部屋の襖の下に、財布が二つあり、アンナたちは消えていた。つまり、最後は、彼が百貨店で買った財布は二つとも彼の所有に戻ったのである。このように見てくると、このテクストは、財布が交通するテクストと言えるであろう。

ところで、この財布の劇的な交通の場面である、財布が二つアンナのところに行った場面と、その二つが彼に戻った場面では、この二つの財布が、彼とアンナ二人のそれぞれの精神のドラマを内包してしまっている。そしてここそが、私見では、もっとも含蓄のある優れた内実のあるテクストの頂点と考える。この部分は、次のように記述されている。

彼はそつとふすまを明けて這ふやうに、アンナの枕もとへ財布を置いて来た。――黒い革の馬蹄型に赤い線の縁取りをした小銭入、今日彼がわざわざ百貨店から前と同じものを買つて来たのだ。

泣きはれた目を覚ますと、彼の部屋のふすまの裾に――なんとこれと同じ財布が二つ並んでゐるではないか。新しい方には昨夜の二十円、古い方には十六円幾ら――アンナがこの間彼から盗んだだけの金をそつくり返したのだ。

まず、第一に、彼はなぜ同じ財布を買ったのか。財布を掏られたので補塡したと、単純に考えることはできない。なぜなら、「わざわざ」買ったからだ。わざわざとは、或る目的のためにとりたてて行う行為を指す言葉である。では、どういう目的だったのか。最初からそうだったとは確定できないが、結果的に「二十円」を入れ、枕元に置いたことからすると、お金を贈るための入れ物として使用するのが目的であったと考えられる。では、なぜ同じ財布なのか。アンナに同じ財布を二つ持たせることに意味があるとは思えない。とすれば、同じ財布を贈ることによって贈り主が自分であることを伝達するためである。アンナが彼の財布を掏ったとき、アンナと彼は顔と顔を向かい合わせていた。ゆえにアンナはどういう男から掏ったかを知っていたわけである。とすれば、同じ財布を置くことは、アンナが掏った財布と同一であることから、置いたのが彼であることを明示することになる。つまり、この黒い馬蹄型の、赤い縁取りのある財布は、彼を示す記号の役割を果たす、と彼は考えたのだ。

ところで、ここで「二十円」というお金の問題がある。この「二十円」は、三晩目に木賃宿に泊った日に、友達から借り集めたものであった。なぜ「二十円」なのか。それは、前の晩泊った時に、宿の女中と次のようなやりとりをしていたからだ。

「ここの異人娘がお気にいつたのなら、お世話しませうか。」
「え。」
「二十円もおだしになりますか。」
「だつて、だつて君、あの子はたつた十三なんだぜ。」
「へえ、十三ですか。」

女中は、アンナの売春の世話をする。そのことに彼は驚き、年齢を挙げてにわかには信じられない。この「二十円」という金、それと同等の金を集めて持ってきた。ここのところで、先行研究では、彼がアンナを買おうとしたと、受け取っているものが多い。[3] たしかに語り手は、「三晩目、彼は友達から二十円借り集めて来たが、別の女中が彼の部屋へ出た。」と記述しており、別の女中が出て来たために買うことが頓挫したのであり、昨晩の女中が出て来れば買うことができた、というようにもここからすると読めなくはない。しかし、昨夜、買春の話を持ちかけられて文字どおり驚嘆しているし、その泊った晩は、「彼は固い寝床にがたがた震えてゐた。」との記述があることからすると、アンナ買春の衝撃の大きさが「震へ」となったと考えられる[4]ので、一夜明けて急にいそいそとアンナを買う元気が出たとは思えない。また、彼はこの日、新しい同じ財布を百貨店から「わざわざ」買ってきている。単に買春の代金を払うためであれば、新しい同じ財布に入れて渡す必要はない。これらの点と、新しい財布に「二十円」を入れて贈った行為からすると、この「二十円」は、アンナが一晩身体を売ると稼げる金額を、そうしなくても得られるようにしてあげたいという思いから出た「二十円」なのであり、語り手の「彼は友達から二十円借り集めて来たが、別の女中が彼の部屋へ出た。」という記述は、アンナに渡したい金集めと、今晩は女中が異なることを「が」という接続詞で繋いだものである、と見てよいように思う。「二十円」の入った新しい財布をアンナの枕元に置いた彼は、泣きながら寝た、または寝ながら泣いた。彼は、掏られた金を取り戻すこともなく、アンナに掏られたこと自体に何のわだかまりも持っていない。アンナを悪く思わないのである。ただただ、接近を計るだけである。この心意に注目すると、彼が泣いたのは、十三歳という「可憐なロシア娘」の窮状に対する同情と、自らの恋を告げることのできない悲痛とが合わさったものと考えることができる。[5]

では、二つの財布を彼に返したアンナには、どのような精神のドラマがあったのか。アンナは、新しい財布が枕元に置かれるまで、彼が隣の部屋に二晩泊り、部屋を覗いたことを知らなかった。そう読めるように記述されている。とすると、枕元に自分が掏ったものと同じ財布が置いてあることにどう反応したのだろうか。財布を返したことから逆算すると、次のように言える。まず、ここに同じ財布があるということは、自分が掏った財布の持ち主でないと置くことができない。とすればあの男（彼）が隣の部屋に泊っていて襖を開けて侵入し置いていった。しかも二十円という金額は自分が身を売る金額であり、宿の女中から知ったのだ、と思う。おそらくこう認知した。その上で考えたことは次のようになる。この新しい財布と金は受け取らない。そして、前に掏った財布も返す。しかも掏った時に入っていた金額にして返す。すでに塩豆をその財布から買っていたわけであるから、手持ちの金を入れて元に戻したのである。このような処理を決意し、自分たちの状況を他者に、しかも掏った相手に知られたことを父に話し、立ち去ることにした。

アンナが彼の部屋の襖の裾に置いていった財布は、新しい財布が

売春に関する情けを受けることを拒否する徴（しるし）、古い財布が掏りを恥じて反省した徴、それぞれの心を代弁している。その意味では、貧窮ゆえにせねばならぬことに対して、彼の好意は充分に受け取った上で、本来のプライドと倫理を立てようとしたのが、このアンナの行為であった、と考えるべきである。ここにアンナのロシア貴族としての原高貴性がある。

結果的に、二つの財布が彼とアンナの間を行き交った。その交通は、彼の接近と好意を担い、アンナの犯罪と倫理とを担っていた。そして、彼の接近が犯罪性をもつことを考えると、彼もアンナも、悪と善両方を有している点において同等の人間である。その中で、彼の好意には一点の無神経があった。「二十円」という金である。それは、アンナに自らの売春を自らに突きつける金であり、傷ついた、と想像される。しかも、彼の情報が正しければ、アンナは十三歳である。彼は期せずして加害者になってしまったのである。この「二十円」は、当時においてどの位置にあるお金かというと、『値段史年表　明治・大正・昭和』[6]によれば、大正十五年において公務員の初任給が七十円、銀行員の初任給が五十五円～七十円であったので、かなりの金額である。また、彼は本郷の下宿に妹と住んでいた。大正十五年における本郷の下宿代は、一室、四畳半ないし六畳で、三食賄い付きで二十円～二十五円であり、彼は、約一ケ月分の下宿代に当たる金を友達から借り集めたことになる。

このような財布の交通のなかで、気になることがひとつある。それは、アンナが二つの財布を彼に返したとき、襖を開けたことである。彼は泣きぬれて寝ていた。アンナは、寝ている彼の姿を見たはずである。どんな気持ちで眺めたのか。具体的には何の記述もないが、このアンナの目が、テクストに刻印されていることを、見逃してはなるまい。アンナの見せた原高貴性と倫理観からすれば、付き纏われ知られる恐怖とともに、彼の好意は受け取った。恋の告白までは受容しなかったかも知れないが、ともかくこのような目であったと想像される。

4　落とした財布の物語

このテクストには、彼とアンナの物語の他に、もう一つの物語がある。彼と妹の物語である。彼と妹は、親元を離れて、東京本郷で下宿生活をしていた。彼は高等学校へ、妹は女学校に通っていた。小銭入れを共有する仲の良い兄妹である。しかし、彼は妹に、財布を掏られたことを一切言わない。しかもアンナに掏られたと、掏った人物も特定できているのに。彼は妹に、財布は落とした、と言っていたらしい。アンナを失った日、下宿へ帰った彼は、次のように妹と会話し、次のような行動をとった。

彼は下宿へ帰つて、妹に、

「この間の財布が戻つた。浅草の警察へ寄つてみたら、可憐なロシアの少女が拾つといてくれたんだつてさ。」

「よかつたわ。お礼なすつて、その子に？」

「さすらひの娘だから、どこへ行つたか分らないよ。――ないものとあきらめてたんだし、その子の記念に何かロシアのもの

を買はう」

「革命からこつち、ロシアのものは何も来やしないわ。くるのはラシヤ売りだけ。」

「とにかく、僕達には贅沢で、長く残るものを買はう。」

朱色の革の化粧箱を彼はあの百貨店で妹に買つてやつた。

「この間の財布」と言っているところからすると、アンナに財布を掏られた晩、掏られたためにアンナの居る木賃宿に泊れず、下宿へ帰ったとき、妹に財布のことを言ったものと思われる。しかも、「戻つた」、「ロシアの少女が拾つといてくれた」と言っていることからすると、財布を落とした、と言ったのである。アンナに掏られたことを彼は妹に言わなかった。妹に対しアンナの悪を隠蔽した。そして今度は、アンナを落とし物を拾って届けてくれた善人に仕立てた。妹に二重の嘘をつくことによって、妹に対して、倫理的で「可憐なロシアの少女」としての像を作り上げたのである。言わば、嘘で固めたロマンチックな妄想の産物である。では、このアンナ像が正しくないのか。実は当っている。アンナは彼から財布を掏ったとき、彼の足を踏み、彼に「失礼」と反対に言われてしまって、「頬を真赤にして微笑んだ。」のである。掏った相手に謝られ、一瞬良心の呵責に苛まれたのである。アンナは掏摸(すり)を悪いと思ってしまっている。十三歳で売春をせざるを得ないように、掏摸もしなければ生活できないのである。つまり、生きるために仕方のない悪をしているのであり、そして、掏った相手からの善意に心痛み、お金も貰わず、掏った金も全額返すのである。そして、家族のために繕い物をし、弟たちを庇護する。アンナは、根は倫理観のある「可憐なロシアの少女」なのである。アンナに一方的に惚れ込んでいる彼は、アンナの泊っている宿に泊れなかった夜、財布を掏られているにもかかわらず、「ロシアの歌をイギリス語で歌ひ歌ひ本郷へ歩いて帰」る。掏られたことは、関係ができて嬉しいぐらいにしか思っていない。このあと、アンナとの間に財布の贈与と返却という事件が起き、具体的な関係が成立した意味では深い関係となった。その意識の流れの上で成立させた、ある意味でおめでたい、「可憐なロシアの少女」像の造立である。それは、自ら保持したくてたまらないアンナ像であり、意外に正鵠を得ていた、と評価してよい。

「とにかく、僕達には贅沢で、長く残るものを買はう。」、この言は、二人の財布が戻った記念に、戻してくれたロシアの少女を顕彰して、物として存在させようとする試みである。たしかに今、二十円と十六円強、友人に今すぐ返却しないつもりなら、三十六円強の金がある。そこで買ったのが、「朱色の革の化粧箱」である。これは何を意味をしているか。テクストの表現から言えば、「ロシアのものを買はう」と言って買ったのだから、ロシア製の化粧箱ということになる。そして、「その子の記念に」と言っているのだから、「ロシアの少女」にちなむものとして女性用の化粧箱という選択をしたものと思われる。その一方で、「妹に買つてやつた」とあるので、記念品といっても彼自身が使う、または二人が所有するにふさわしいものではなく、彼女だけが使うものを、記念品としたのである。妹はこの化粧箱に、財布を拾って届けてくれた誠実な「ロシア

の少女」を見る。一方、彼は、化粧箱にアンナその人を見る。しかも自らが作り上げた、財布を拾って届けてくれた誠実な「ロシアの少女」という虚像を。しかし考えてみれば、この虚像は、実は虚ではない。彼は、二つの財布を返してよこしたアンナの倫理を知っている。とすれば、財布を拾って届けてくれたアンナ像そのものは嘘だが、この像に込められた心の実質は嘘ではない。彼は、妹を巻き込むことによって、倫理的なアンナの実質を定着させておきたかったと考えられる。そして妹は、彼の真意は全く知らない。素直に彼の言うことを受け入れて、化粧箱を買ってもらっただけである。それにしても、二人で買った小銭入れの財布は「黒い革」製であり、この化粧箱も「革の化粧箱」、革製で共通しており、財布は「化粧品を飾つたガラス箱の上の籠」に売られていたもので、今度は化粧箱を買った。化粧品の上と、化粧箱、これも繋がっている。さらに、赤い縁のある財布と朱色の化粧箱、彼における財布へのこだわりは強かった、と言うべきである。

そして、落とした財布の物語は、まだ終わらない。先の引用の後に、次の一文がある。

――三四年後、花嫁の旅にも妹はその化粧箱を持つて行つた。

アンナが去りその記念に朱の化粧箱を妹に買い与えて三、四年たった。そして妹は結婚した。その嫁ぎ先へ行く旅か、もしくは新婚旅行に妹はこの化粧箱を持って行った。おそらく素直な妹は、彼に買ってもらったものでもあり、大切に使っていたのであろう。彼の方では、花嫁となった妹に持たれた化粧箱、そこにアンナの幸せな面影を夢想したことであろう。一方的な行為の中で、妹は、親切なロシアの少女の記念を受け入れて、素直にのびやかに生きてゆく。こまった兄と、質のいい妹の物語がここにある。

5　日本人アンナの正体

このテクストは、彼が、浅草でアンナが消えてから、おそらく三、四年を経たとき、銀座で、タイトルともなっている「日本人アンナ」に遭遇するところで終わる。

[1]銀座の三月の夜、不良少年らしい群が歩道一杯に拡がつて歩いて来る。[2]街路樹の傍に道をよけた彼は、その群のうしろに蠟人形じみた白さの美しい少年を見た。[3]あらい久留米がすり、眼深にかぶつた古い黒の釣鐘帽子、裾の切れた学生マント、朴歯の下駄の素足が噛みたくなる綺麗さ――女か。[4]すれちがひざま彼は、

「あ、アンナだ。アンナ。」

[5]「アンナぢやない。日本人だよ。」と、少年ははつきり言つて、風のやうに消えてしまつた。

[6]「アンナぢやない。日本人だよ。」と、彼がつぶやきながら、ふと背広服の内ポケツトに手を入れた。[7]果して財布がない。

（数字は小林が付けた。1は第1文を示す）

彼は「背広服」を着ていることからすると社会人になっていて、銀座界隈に勤めているのかも知れない。三月の夜、歩道一杯に歩いて来る不良の群を街路樹側に避けて、彼は不良たちと擦れ違い、そ

の中の一人をアンナだと思った瞬間に、財布を掏られたのである。この、彼の財布を掏った人物は、彼が思ったようにアンナなのか。この点については、先行研究では、ほぼ、アンナだと受け取っている。[7] しかし、そうだろうか。

物語内容はいま述べたとおりであるが、その表現のされ方、物語言説を語り手に注目して検討すると、次のように言える。

引用の第1文は、「不良少年らしい群が（中略）歩いて来る。」とある。「歩いている」ならば語り手の客観的記述であるが、「来る」には、それを受けとめる主体が想定されている。それは、第2文に出て来る主体の彼である。ということは、第1文を語り手は彼の視点に寄り添って書いているわけで、ジュネット風に言えば、語り手が彼に焦点化した記述ということである。第2文は、「彼は（中略）少年を見た。」であるので、これも語り手は、彼の知覚体験に寄り添って記述している。第3文は、その彼が「見た」少年の服装と身体の一部、それに対する彼の判断が記述されており、語り手は、彼の視覚認識と意識を代行する形で記述している。第4文、第5文はそれぞれ彼と少年の発話と行為の記述であり、語り手は、小説内の事実という物語内容の客観的叙述を行っている。第6文は、彼の呟きと内ポケットに手を入れる彼の行為をこれも客観的に記す。しかしこの一文には、彼の心理が張りついている。「つぶやき」は疑惑であり、手を「内ポケットに入れ」る行為は疑惑を確認するためのものである。この疑惑と行為は、そのまま、この少年がアンナだとすれば財布を掏るかもしれないという思いが瞬時に湧いたことを表現している。その意味で言えば、この一文は、文章の姿としては語り手による客観的記述でありながら、語り手が彼の心理に寄り添ったものであることがその内実である、と考えた方がよい。そして、第7文、「果して財布がない。」が来て、テクストは閉じられる。

さて、この一文は語り手によるストレートな記述なのか。それとも、語り手が、彼の心内語を記述したものなのか。第6文からの繋がりから言えば、彼が内ポケットに手を入れてみると、財布を掏られたことに気づいた、という意味が表出されている、と見てよい。「果して財布がない。」の「果して」は、案の定、思ったとおり、という意味で、予め想定したことがその通り証明されたことを示す言葉である。彼は掏られたことを想定して内ポケットに手を入れたわけであるから、財布が無い事案により、「果して」と思うのは当然である。ゆえに、この第7文は、彼の心理を語り手が代替して記した文章である、と見なすことができる。第6文に表現された彼の意識の流れからはそう言えるが、しかし、第7文は、第6文の彼の意識の流れを踏まえた上で語り手が、登場人物の彼の外から「財布がない」と断定し、認定した、と受けとれる可能性もある。この二様の解釈に決着をつける指標となるのが、「果して」をめぐる、このテクストにおける使用法である。「果して」は、先に述べたように、彼の行為を記述することによって彼の心理を語る文の直後で使用され、その後に来る言葉「財布がない」も、ないと思った、知った、と、彼の心理を語っていたとも捉えられた。この「果して」と同一の方法で記述されたものが他に二つある。

まず、アンナが彼らと同じ財布を持っているのを見た場面である。

この可憐なロシア娘もまた女学生の流行に――。

さうだ、彼が妹に誘ひ出されてある百貨店へ行つた時、（中略）買つた財布だつた。

アンナもそれと同じ財布――

「さうだ」の前の部分では、ダッシュで明示されているように彼の意識、心理が表現され、「さうだ」の後も百貨店でこの財布を買ったことを思い出す心理が記述されている。ということは、「さうだ」は、語り手が彼の気づきを表現した言わば彼の心内語である。

もう一箇所は、彼がアンナの後をつけて木賃宿の二階を見るために胃腸病院の白壁に立った場面である。

彼は（中略）白壁に背を寄せたが――立ちすくんだ。

その白壁に中学生が一人（中略）木賃宿の二階をじつとにらんでゐるのだ。やはりアンナの後をつけて来たのにちがひない。

引用の中の一行空きは、このテクストの第一セクションから第二セクションの切れ目を示すものである。

中学生も彼と同じように二階を見ていた。それを見て彼は「立ちすくんだ」。つまり、驚いて硬直したのである。その驚き、恐れの心理のあとで、「やはり」とあり、この中学生も自分と同じように後をつけたと気づき、認定しようとする心理が記される。この「やはり」も語り手が彼の気づきを表現した彼の心内語と見てよいであろう。

さて、「果して」はどういう言語であるか。前述したように、この語の前の一文が掏られたのではないかという彼の予測の心理を表現しており、その結果、次の文で「財布がない」ことを確認するわけであるから、この「果して」の用法は、これまで考察してきた「そうだ」「やはり」と同一の文章表現の前後関係を有している。とすれば、このテクストにおける語り手による語り方の手法としての、彼の心内語を表現する方法として「果して」は使われている、と言え、語り手の外からの客観的記述という見方は退けることができよう。

とすれば、次のようなことが起こる。「果して財布がない」というのは、彼が想定したとおり財布が掏られたということであり、それはアンナがかつて自分の財布を掏ったことと合致するので、この少年はアンナであると、彼が認定したということである。では、この少年は本当にアンナなのか。このテクストは、登場人物の外部から自由に語ることのできる語り手をもつ三人称小説であるにもかかわらず、その語り手がこの少年がアンナであると直接語るところはない。ということは、テクスト内で彼が、「蠟人形じみた白さの美しい」容貌、「噛みたくなる」性的欲望を起こさせる「綺麗」な「素足」という女性的表象と、掏摸の事実とからつくり上げたアンナであり、アンナかどうかその正体は、読者から見ると不明なのである。彼はアンナと確信した。ただし、彼が言うアンナの正体は不明である。このようなテクストとして読むべきである。そして、この「日本人アンナ」の正体が分からないことは、テクストに内包さ

れている空白と考えられる。周知のように小説テクストは、何をどう書いてもよい。読者が知りたいと思うことを書かない自由が語り手にはある。ただ、その空白のためにテクストの構造が緩んだり壊れたりしてしまうのであれば、そのテクストは優れていないということになる。その点において、この「日本人アンナ」というテクストは、この少年がアンナかどうかは分からないというテクストの空白を所有しつつ、充分にテクストとして自律し完成している、と言える。

このように、銀座で彼の前に現れた美しい少年は、テクスト論、語り手論、読書行為論の観点からすればアンナかどうかは不明であり、彼においてのみ、かつてアンナに掏られた経験を最終の根拠にして、アンナであると認定されているだけなのである。そして、このテクスト内の彼には、この少年がアンナであり、テクストの読者には、この少年がアンナかどうかは不明であり、テクストの空白を形づくっているものと受けとる、この落差に「日本人アンナ」というテクストの構造上の優秀性と魅力があるのである。

先述のように、先行研究の多くは、この少年をアンナであると読んでいる。そればかりか、作者川端康成もこの少年をアンナであるとしている。川端は、『川端康成全集　第十一巻』（新潮社　昭和二十五年八月）の「あとがき」で、次のように記している。

後に日本の不良少年に変装してゐるアンナに銀座で財布をすられる終りは、アンナにたいする親愛を点じてゐる。

川端は、この少年をアンナだとして書いた。しかし、テクスト論等の観点に立てば、少年がアンナかどうかは不明の、テクストの空白である。そう簡単には、テクストは作者の自由にはならないのである。

村松定史は、昭和五十二年時点の論において、次のように述べている。[8]

少年がアンナであろうとなかろうと、実はそれは問題ではないのではあるまいか。「風のやうに消えてしまつた」美しい少年も、「彼」の記憶の中のアンナも、実在者か非実在者か不分明なところにこの作品の俗性におぼれぬ普遍性がある。

少年がアンナであることの不明性に触れた言説で、それを作品の評価に繋げた優れた見方が提示されており、読み巧者の切れがある。けだし、炯眼と言えよう。

6　不良・男装・掏摸・亡命ロシア人

「日本人アンナ」というテクストは、大正末から昭和初期という時間、浅草・銀座という空間、不良・男装・亡命ロシア人という文化的コンテクストに支えられて成立している。テクストの物語内容と文化的コンテクストがどのように絡み合っているのか、その特徴的な表象である、不良、男装、亡命ロシア人に、掏摸も加えて検討を行ってみる。

テクストの末尾に「不良少年らしい群」が登場する。平出亜佐子『明治大正昭和　不良少女伝――莫連女と少女ギャング団』[9]によれば、不良は日清戦争後に発生したとするのが通説のようであり、大正時

代には「不良文化が花開く」と言ってよいほど不良が増加したという。不良の主な犯罪は、脅喝、窃盗、掏摸、詐欺、女性から金品を捲き上げ酌婦に売り飛ばすこと、などであった。

大正十二年四月七日の「東京朝日新聞」朝刊の記事「七日を期して不良分子大検挙　全市警察連絡の下に　殊に恐ろしい不良少女」によると、見出しにあるように不良の一斉検挙が行われている。そこには、東京市内に、ブラックリストに挙がっている者が二千五百名、そのうち不良少女が二百五十名、その他に不良分子の男一万人、女五百人程がいる、と記されている。

美術史家の安藤更生は、昭和六年刊行の『銀座細見』[10]で、不良について次のように記している。

銀座だつて勿論不良少年は居る。然し余り目立たない。何度も云ふが銀座はインテリゲンチヤの街だ。だからこゝには彼等の手を延す余地が少い。不良少年はカフエは余り歩るかない。むしろモナミとか不二屋とかの喫茶店に頑張つて居る。

銀座は不良が充分には活躍できない場所であったようである。また、若年である彼らは大人が女給と遊ぶカフェではなく、長時間屯(たむろ)することのできる喫茶店を根城にしていた様子が窺われる。彼の前に現れた不良少年たちは、このような銀座ならではの特徴を持っていたようである。

ところで、彼がアンナだと思った少年は、男装をした女性、しかも掏摸である。不良少女が男装をすることは、当時、よくあることであった。

大正十二年三月一日の「東京朝日新聞」朝刊には、「男姿の女掏摸　娼婦に売らるゝ厭さに黒髪を断つて　都に憧れた流転の少女」という長い見出しで、男装の女掏摸が捕らえられた記事が出ている。[11]

此程象潟(きさかた)警察署の宇津木刑事に捕まつた一人の女掏摸があつた鳥打帽に吊鐘マントを着た男装の美少女であつた帽を脱ぐと綺麗な五分刈頭が現れマントの下には久留米絣の揃ひを着て居つた捕へた宇津木刑事も『始めは全く男子の言葉でしたが懐中が膨らんでゐるので未だ何かかくしてゐるんだらうと思つて上から押へると驚きましたよ、柔かい乳房が盛上つてゐるのでせう』といひ『女だなと訊くと始めて「然(そ)うよッ」てな声音を出すのです』

ここで注目すべきは、男装の仕方である。「鳥打帽」「吊鐘マント」「久留米絣の揃い」といういでたち（扮装）である。テクストの「少年」は、「古い黒の釣鐘帽」「裾の切れた学生マント」「あらい久留米がすり」であった。学生や若者が着用する久留米絣に、帽子とマントで全身を覆う装いであり、これが男装の定番であったようで、テクストの少年の男装は、当時の不良少女の男装と同一であり、しかも掏摸を働くところも同一である。これによって、テクストの不良「少年」の男装と掏摸は、当時の不良少女の実態を如実に反映したものと言える。

さて、アンナは、革命により祖国を脱出した亡命ロシア人であった。一九一七年（大正六）のロシア革命で亡命した人は約二百万人と言われており、そのうち日本へ亡命した人はごく少数であった。

ポダルコ・ピョートル『白系ロシア人とニッポン』[12]によれば、一九二四年（大正十三）末の在日ロシア国籍者は八十四名である。主な居留地は、東京、横浜を中心とする関東地方、神戸、北海道であった。亡命者が少なかったのは、日本が政治的にも法律的にも亡命を認めておらず、またロシア人が日本に対する知識をもっていなかったことが挙げられている。

川端康成は、エッセイ「大火見物」（『文藝春秋』大正十二年十一月）の中で、日本館にて亡命ロシア人の一団が出演していたことを記している。数名、名前が記されており、その中にこのテクストのモデルである、アンナ・ルボウスキイ三姉弟の名も出てくる。また、新聞記者松崎天民は、昭和二年刊行の『銀座』[13]の中で、亡命ロシア人女性の女給について記している。

ロシヤに彼の騒ぎがあつた頃から、いろんな女が日本に流れて来て、カフエーに現れたり、芸妓になつたりして居た。此の東京でもロシヤ女を、其処此処のカフエーに見たり、赤坂や神楽坂の待合に見ては、惻隠の情を起したものだつた。カフエーロシヤのニーナも震災後に（神戸から―小林補）東京へ来て、今日までロシヤの『異国の花』として、一顰一笑して居る一人であります。（中略）

カフエーに見るロシヤ女と云へば、多くは安価な私娼婦であつて、五円十円の金に依つて、何うにでもなるやうな女が日本橋にも居たし、銀座の界隈にも巣くつて居た。（中略）

『本国の帝政が亡びなかつたら、私は上流の令嬢として、幸福な月日に恵まれて居るのです』と、ニーナは口癖のやうに、在りし日の夢を描いて居ると云ふ。

これは、天民のルポルタージュであり、カフェ、ロシアの女給ニーナのことと、亡命ロシア女性の生活、なりわいが記述されている。このニーナとアンナとを対照させてみると、ニーナは上流階級の出、アンナも父が勲章をもらうような人で上流であり、かつては同様の身分であった。しかし、亡命した日本では、貧しい暮らしをしていてこれも同様である。そして、ロシアの女性の多くが売春せざるを得なくなっている、という。このことは、アンナに通じている。とすると、テクストにおけるアンナの描かれ方は、当時の亡命ロシア人の女性のありようを充分に反映していると言える。

このように検討してくると、「日本人アンナ」というテクストは不良、男装、掏摸、亡命ロシア人という文化的コンテクストの表象について当時の実情、文化をかなりしっかりと反映したものである、と言える。

振り返ってこのテクストを総合的に眺めてみると、彼、妹、アンナ、それぞれの生と心理がくっきりと描かれ、とりわけ、誠実で可憐なアンナ、仕方がない悪としての掏摸をする少女アンナ、さらには敢然と掏摸を行う大人びたアンナ、という三様のアンナを描き切っている。しかも、四百字詰原稿用紙に換算して八、九枚の分量で、立体的にして緊密に書いている。この密度と完成度は、優れた作品と言うにふさわしいと言える。吉村貞司は、新潮文庫『掌の小説』[14]の「解説」において、浅草を舞台とする四編の掌編小説の中で

「『日本人アンナ』がもっともすぐれている」と言った。私見では、川端康成の小説の中でも極めて高度な出来を示していると考える。

最後に、「日本人アンナ」の研究について触れておく。現在、「日本人アンナ」を正面から取り上げた論文は、五編確認できる。羽鳥徹哉は、「川端康成の「日本人アンナ」を読む」[15]において、丁寧な〈よみ〉を示し、表現の独自性を指摘した。それらは概ね首肯し得る。村松定史の「「日本人アンナ」論」[16]は、羽鳥に「詳細な分析はゆずる」として十四種に亘るテクストの校異、この小説についての作者の言及の網羅、作品構成の検討を行った。「日本人アンナ」研究の二次資料ともなる緊密な論である。馬場重行は、「「日本人アンナ」論――〈悪〉に生きる美しさ――」[17]において、語り手論を導入し、「〈語りの仕掛け〉」に注目しつつ多様な「〈アンナ〉像」の追究を行い、〈よみ〉を進展させた。森晴雄は、「「日本人アンナ」――朱色の皮の化粧箱」[18]において、今和次郎編『新版大東京案内』[19]を援用して木賃宿の仕組とアンナの生活との関係を提示し、文化の方面に論を開いていった。さらに舘健一は「川端康成「日本人アンナ」論」[20]でテクスト内時間の特定を行った。他にも重要な指摘を含む論文、解説もあるが、まずはこの五つの論があれば、「日本人アンナ」はかなりよく理解できるものと思われる。これらの成果に対して屋上屋を架すにすぎないが、テクスト論、語り手論、読書行為論の観点から考察を試みた。

注1　舘健一「川端康成「日本人アンナ」論」(『二松』　平成十七年三月)

2　週刊朝日編『値段史年表　明治・大正・昭和』(朝日新聞社　昭和六十三年六月)

3　彼がアンナを買おうとしたとする論には次のものがある。馬場重行「「日本人アンナ」論――〈悪〉に生きる美しさ――」(川端康成研究会編『論集川端康成――掌の小説』おうふう　平成十三年三月)では、「「三晩目」。「アンナ」を買う決心で「木賃宿」を三度続けて訪れた「彼」」と記述され、注1の舘健一の論文でも、「別の女中が出た事により買い損なうとされる」と記述しており、ともに、彼は「二十円」を持ってアンナを買おうとした、と解釈している。森晴雄「「日本人アンナ」――朱色の皮の化粧箱」(『掌の小説』論　「雨蛙」その他』　龍書房　平成十五年五月)は、「アンナが他の男に身を売らなくてもすむようにとの気持からである」としている。買春のためでないとすることには同意するが、このような「気持」については疑問である。

4　彼が木賃宿に行った二晩目には宿泊し、「固い寝床でがたがた震へてゐた」わけであるが、その心理を、羽鳥徹哉「川端康成の「日本人アンナ」を読む」(『解釈』　昭和五十年十月)では、「アンナのことを想像してである」とし、注1の舘健一の論文では、「アンナへの欲求と現実との狭間で葛藤が生じ、「がたがた震へ」、「泣きはれ」るのだ」としている。また、注3の森晴雄の論文では、「他の男に買われているのを想像して眠ることなど出来なかった」としている。

5　彼が三晩目に泊ったとき、「泣きはれた目を覚ます」ことについては、羽鳥徹哉の同じ論文では、「つましい少女の心で、懸命に家族の生活を支えている」「アンナの姿に、すっかり参ってしまった」ことと、「お金を彼女の枕元へ置いて来る」「自分自身の行為に対するナルシシックな感激まで加わっ」たからとしている。また、注3の馬場重行の論文では、「財布を「アンナ」に贈ることで自身の内面にあった欲望の贖罪をなし、涙ながらに「アンナ」への同情を覚える」、としている。

6　『値段史年表　明治・大正・昭和』は注2と同じ

7　この「少年」がアンナであると読む論には、次のものがある。注4の羽鳥徹哉の論文では、「アンナが女性としての制約を越えて生きようとし

ている」とし、注3の馬場重行の論では、「既に父や弟たちと離れ、「不良少年」として〈悪〉を生きる〈日本人アンナ〉」と記述している。注3の森晴雄の論文では、「少女アンナは、ロシア人ではなく日本人として、少女ではなく少年として力強く生きている」としている。また、注1の舘健一の論文も「この「日本人だよ」という言葉の中に、亡国の念と日本人として生きている現在の姿とを読み取るべきだろう」と、記述している。

8　村松定史「「日本人アンナ」論」（『解釈』　昭和五十二年一月）
9　平出亜佐子『明治大正昭和　不良少女伝――莫連女と少女ギャング団』（河出書房新社　平成二十一年十一月）
10　安藤更生『銀座細見』（春陽堂　昭和六年二月）
11　この東京朝日新聞の記事は、注7の平出亜佐子の著書に掲載されている。
12　ボダルコ・ビョートル『白系ロシア人とニッポン』（成文社　平成二十二年七月）
13　松崎天民『銀座』（銀ぶらガイド社　昭和二年五月）
14　川端康成『掌の小説』（新潮社　昭和四十六年三月）の吉村貞司の「解説」
15　羽鳥徹哉注4の論文
16　村松定史注8の論文
17　馬場重行注3の論文
18　今和次郎編『新版大東京案内』（中央公論社　昭和四年十二月）
19　森晴雄注3論文
20　舘健一注1論文

付記　「日本人アンナ」の本文は、『川端康成全集　第一巻』（新潮社　昭和五十六年十月）に拠った。ただし旧字は新字に改めた。

（こばやし・さちお　上智大学名誉教授）